点と線

No. 91

発行人　渋沢　茂
発行所　一般社団法人千葉県社会福祉士会事務局
〒260-0026　千葉県千葉市中央区千葉港7-1
塚本千葉第５ビル３Ｆ
TEL043-238-2866
FAX043-238-2867
http://www.cswchiba.com/
E-mail：office@cswchiba.com
※　点と線はメール配信でも読めます！

新体制発足

２　会長挨拶　新理事体制紹介
３　≪特集１≫
新任理事に聞く！「福祉に携わった経緯と、今の仕事でなければ何をしていた？」
８　≪特集２≫
ソーシャルワーカーデイ特別企画　「わたしの点と線」ネットワークを考える
ブレインストーミング
12　地域集会　／　社会福祉士のわ　／　（新企画）ぼやきの壺
14　事務局だより

会長就任にあたって

千葉県社会福祉士会会長
渋沢　茂（しぶさわ　しげる）

千葉県社会福祉士会の皆様、関係の皆様、今期から会長をさせていただきます渋沢茂と言います。就任の挨拶として、自己紹介と社会福祉士会について思うことを記させていただきます。

一九六四年千葉県市川市で生まれました。幼少期から父の仕事の関係で横浜、新潟等に転校を重ねていました。大学と専門学校を卒業した後、知的障害を持った子どもたちが暮らす施設で仕事を始め、障害を持った方の地域生活支援の仕事をした後、現在は茂原市で中核地域生活支援センターと自立相談支援センターなどの仕事をしています。

社会福祉士は一九九七年に通信教育を受講して一九九八年の国家試験で合格しました。当時勤めていた障害児施設の仕事に行き詰まり感を持って、福祉のことを改めて勉強してみようと思ったのが受講のきっかけでした。合格した後すぐに社会福祉士会に登録しましたが、中央や県の活動に参加することは全くありませんでした。参加することの意味を感じなかったからです。その後も二〇年近く、名ばかり社会福祉士でおりました。

そんな自分ですが、前回の理事改選の時に理事の就任を依頼され、断ることが出来ずに理事会推薦で理事をさせていただくことになりました。

理事になって思ったことは、組織のあり方がとにかく分かりにくいこと、そして運営が硬直化していること。社会福祉士の専門性が語られることはあってもそれを突き詰めて考えることはなく、あぐらをかいているようにも見えました。一方で思いを持って活動している素敵な方が沢山いることも分かりました。また、資格創設されて以来の先達の思いと活動があったことを知りました。それを沢山の方が引き継いできて現在の会があることを感じています。そして次の時代の社会福祉士会をつくっていく時期だと思っています。

分かりやすい組織をつくりたいと思います。会員内外の方からのご意見を伺うこと、それを皆で話し合う機会をつくりたいと思います。

考えなければいけない課題はいくつもあります。たとえば、委員会や役員任期など組織のあり方に関すること、助け合い制度のこと、地区集会のあり方のこと、ぱあとなあや司法福祉についてなど。また、基礎研修等のあり方について疑問に思うこともあります。何からどのように行うか皆さんのご意見を伺いながらすすめていきたいです。

皆さまがお考えになっていること、話し合いたい事など、是非ご意見を下さい。皆さまと一緒にこれからの社会福祉士会と社会福祉士のあり方を考えていきたいです。よろしくお願いいたします。

平成二十八年度
千葉県社会福祉士会新理事体制

会長：渋沢茂
副会長：相澤雅則、奥野不二子、大浦明美
事務局長：岡本武志
事務局次長：竹嶋信洋、榑林元樹
総務委員会（企画・広報）：榑林元樹、山口利史
総合相談委員会（地域包括・相談事業）：竹嶋信洋
研修委員会（研修啓発）：浅見雅人、神田一彦、宮本哲男
司法福祉委員会：川上鉄夫、【大浦明美】
ぱあとなあ：小川晴雄、鈴木勝英、【奥野不二子】
災害対策委員会：常陸谷政彦、榑林元樹
松戸市事業：宮本哲男、竹嶋信洋
【　】は副会長兼任
監事　山口定之、岡本崇広
相談役　五十嵐伸光

特集

新任理事に聞く！「福祉に携わった経緯と、今の仕事でなければ何をしていた？」

渋沢 茂（しぶさわ しげる）

高校3年生の夏、部活を引退した。好きだった娘に振られた。その頃に読んだ本でドイツの哲学者は「生きていることも死んだ後も精神は変わらない」と言っていた。厭世的な気持ちだった。鎌ヶ谷駅前のお好み焼き屋でそんな話をしたら、仲間が涙を流しながら励ましてくれた。その時、自分の為に涙を流してくれる人がいる間は前を向いていなければいけないと思った。家族や友人など多くの方がまわりにいてくれたから今の自分があると思った。今にして思えばおこがましいけど、今まで皆さんにいただいたものを誰かに返していきたいと思った。それが福祉の仕事をしようと思った原点。

それからは福祉の仕事を目指してまっしぐら、だった訳ではなく。意気込んで入学した福祉系の大学を半年で退学。お茶の水と赤坂の喫茶店での仕事を極めた。入りなおした大学では麻雀に明け暮れた。広告代理店の入社2次試験に遅刻した。公務員試験に合格した。専門学校に行ってその後に知的障害を持った子どもたちの施設に入職した。

お好み焼き屋の夜がなければ福祉の仕事にはついていなかったと思う。その後もどこかで何かが違っていたら別の何かになっていたかもしれないですが。もう一度どこかからやり直しが出来たとしても今の仕事を選ぶんじゃないかと思う。

相澤 雅則（あいざわ まさのり）

この度二期目の副会長を仰せつかり、改めて責任を痛感しています。

さて、私が福祉の仕事に就くきっかけになったのは、自らの疾病が原因でした。高校を卒業すると同時に手に職をつけたいと調理師学校に進んだ私は、その後約十年間調理師としての仕事をしていましたが、椎間板ヘルニアの二度目の手術をきっかけに三十歳で転職を決断しました。

その頃に縁があって社会福祉法人九十九里ホームの事務員として入職させて頂き、そこではじめて福祉の仕事のやりがいを感じ、高齢者・障害者施設の相談員としての実務経験に加え、通信教育にて社会福祉士を取得した後に、同法人にてＭＳＷを経験しました。

現在は専門学校や大学での講師や、福祉人材確保の活動に携わっていますが、調理師免許を持つ社会福祉士として調理師学校でも講師をしております。そして、多くの若者に「人を援助することの大切さ」を伝えていきたいと考えていますが、私はこの仕事でなかったら調理師をしていたと思います。

浅見 雅人（あさみ まさと）

私は、二十歳から特別養護老人ホームへ就職し、七年間ほど従事していました。その後、介護老人保健施設へ転職し、支援相談員兼施設ケアマネジャーを三年ほど勤めてから大手の居宅介護事業所に九年間所属し、三年前に居宅介護支援事業所ケアサービスココフレを立ち上げ現在管理者兼在宅ケアマネジャーをしております。

今回のテーマ『この仕事でなかったら』と考えるものの、もともと高校生からボランティアや福祉に興味

があり、ここまできた経緯がある為、別の仕事をしている自分をうまく想像することができません。私は『社会福祉士になりたい。』『相談員になりたい。』と常に考え思いを募らせ夢だった社会福祉士になれました。しかし、必ずしも順風満帆とはいかず、悩み、苦しみ、建物の影で涙を流していた時期もありました。その時に『他の仕事についていたら。』と頭をかすめることもありましたが、福祉以外は考えられずここまで来ました。

今後もできれば福祉人として邁進し、皆様の支えや御尽力、御指導を賜りながら業務に従事していきたいと思います。

大浦 明美（おおうら あけみ）

私が社会福祉士として仕事をしていなかったら。私は専業主婦として過ごし、趣味三昧に生きていたと思います。

茶道・華道・書道の師範等の資格を取得し、その伝統文化の道を研究し、その知識・技能を後輩に継承すると共に、私の活躍をインターネット等で世界に向けて発信し、「文化のグローバル化」に参画していたと思います。

「まるで夢のよう…」でも、「やればできたかも」、「今からでも遅くないかしら…」、いえ、それよりも「主人との時間を大切に」した方がいいわね！

岡本 武志（おかもと たけし）

社会福祉士を取得して相談援助業務に就くことを決めたとき、私は二四歳でした。

考古学を専攻した大学を卒業後、学生時代に手術・リハビリをした経験から理学療法士を目指していました。そしてこれからの高齢化社会を見据え、非常勤で特別養護老人ホームのデイサービスに勤めました。働きながら理学療法士の専門学校入学に向けて勉強しましたが、このデイサービスが私にとっての大きな転機となりました。

職場にはいつも明るくて優しい先輩、上司がいました。ご利用者とそのご家族は、未経験者の私を温かく、快く受け入れてくれました。ご利用者の方々は様々な症状や境遇の方がおり、私は高齢者福祉に大きな興味を持つとともに、介護の奥深さを体験させてもらいました。その結果、この施設で働き続けたいと思うようになり、社会福祉士を取得して生活相談員になろうと決めました。もしかしたら、私は理学療法士になっていたかもしれません。でも後悔は全くありません。私は社会福祉士の仕事がとても気に入っていますから。

小川 晴雄（おがわ はるお）

ご縁とは不思議なものです。学生時代にお世話になった師が、ご夫婦で有料老人ホームに入所し余生を楽しまれていました。

お子さんがいないこともあり、幾度となく訪問していましたら、施設の方から特養を立ち上げるので、「ご一緒に働きませんか」と声をかけていただきました。

その当時は「福祉」の世界にご縁がなく福祉を学ぶ切っ掛けとなり、その後の方向性を決めることになりました。

漠然と考えていたのですが、利益の追求だけでなく、何か人の役にたてるような仕事に携わりたいとの気持もありました。

いま「後見」の活動に身を投じていますが、この仕事でなかったら、これもご縁でお誘いをいただいた特養と異なる施設の「相談員」で汗水たらして「ああでもないこうでもない」と四苦八苦しながら日々を過ごしていると思います。

奥野　不二子（おくの　ふじこ）

『福祉とＮＰＯ』

四十代後半に北海道から千葉県に移りました。知人が起業した都内の小売業の会社に入りましたが、小さな会社だったので実務経験がないのに総務・経理の仕事を任され、法人税の申告時期には税務署の夢を見ていました。

その会社を退職と同時に、コミュニティビジネスという手法での地域課題の解決を目指すＮＰＯ法人ＡＣＯＢＡの会員になりました。福祉分野の事業の立上げに役立つと考え、社会福祉士の資格を取ったのが福祉の仕事に就いたきっかけです。五年前にＡＣＯＢＡが運営するインキュベーションオフィスの一画に社会福祉士事務所を開き、現在は社会福祉士としての業務が七割、ＮＰＯの活動が三割くらいです。仕事でも人脈でもつながることが多く、両方続けていてよかったと思います。

福祉の仕事についてなかったら…

故郷に戻り仲間を集めて、東京一極集中はよろしくないと、地方を元気にしたいＮＰＯを立ち上げ、その勢いに乗り市議選に立候補しているかもしれません。人生は巡り合いです。

川上　鉄夫（かわかみ　てつお）

小学校の教員になりたいと思っていました。そのため、大学も小学校の教員養成課程に進みました。教育心理学科に入り、発達心理学などを勉強していました。そのうち、心理学が面白くなってきて、心理職になりたいと思ったのです。しかし、私が大学を卒業したのは、もう三十年以上も前です。当時は、心理職の募集はほとんどなく、学部卒で心理職というのはとても狭き門でした。ちょうどそのとき、かつて東京都で心理職として働いていて、その後大学の教授になった先生と出会い、東京都には福祉職という職種があり、「心理職とは違うけれども近いところもあるよ」と教えてもらいました。そのようなわけで、東京都の福祉職を受けたところ受かったのが、福祉にかかわるきっかけです。したがって、福祉の勉強を始めたのは、就職をしてからになります。

このようなわけなので、この仕事をしていなかったら、きっと小学校の先生になって、子どもと楽しく過ごしていたと思います。

神田　一彦（かんだ　かずひこ）

中学や高校の同級生に会ったとき、「はぁ？福祉の仕事？」と話がありました。若いころの僕には、福祉の要素のカケラもなかったのかな？と感じました。でも、そうかもしれません。仕事へのきっかけは、友達の家の保育園。保育園で遊んでいると、楽しかったですね。それだけですから。なので、正直、福祉を極める、と考えてこの道を選んだ訳ではなく、自分が楽しく仕事ができれば、それでいいのかもしれません…。福祉の学校に行って、なぜだか保育士資格は履修せず、最初の実習先が高齢者の施設で、いろんな意味での衝撃を感じました。現在は、高齢者の施設で利用者の皆さんと楽しく一緒に過ごしています。

この仕事でなかったら、きっと観光バスや電車、トラック運転手などなど、全国いろんなトコに行ける乗り物の運転手になっていたかも知れません。（飛行機は、視力でムリでした）都会の電車にのって通勤することに少し抵抗感があるので…、なんだか息苦しく感じまして…。福祉と旅が融合したサービス業、ＫＲＳ（かんちゃんりょこうサービス）会社の設立も夢となっています。

樽林　元樹（くればやし　もとき）

今年から新しく理事となりました樽林元樹です。よろしくお願いいたします。

今は浦安市社会福祉協議会の職員として、浦安市老人福祉センターで、遊びに来てくれるオジィ・オバァのアイドルとして活躍中です。

現職に就く前は、北海道で保育士養成の専門学校で働いておりました。当時流行っておりました「北の国から」というドラマに触発され、大学卒業後すぐに移住し、憧れの北海道生活を満喫しておりました。冬の一面の銀世界や、春になり一斉に芽吹く草木の生命力、深い山々と綺麗な渓流、幾重にも続く美瑛の丘の景色、そして出会った学生たちのイキイキとした姿が今でも瞼を閉じると鮮やかに蘇ってきます。

七年間勤めた学校が学生数の減少から学科の閉鎖が転機となり、いろいろなご縁から、浦安市社会福祉協議会で働かせていただくことになりました。今の仕事についていなかったら、そのまま北海道に残ってログハウスビルダーになっていたかもしれません。

鈴木　勝英（すずき　かつひで）

私の現在の仕事に繋がる第一の人生の会社での仕事は、医療情報システムの構築に関係したことでした。医療の関連分野として介護があり、介護情報システムの構築にも関係しました。そしてこの第一の人生の会社（電機メーカー）が新規事業として介護・福祉分野の事業の推進プロジェクトを立ち上げ、事業の可能性を検討しましたが、電機メーカーにはノウハウがなく難しいとの結論になりました。このプロジェクトに参画していた私はこの会社を退職後、第二の人生のＮＰＯ法人を立ち上げ介護事業を始めました。社会福祉士の資格はこの会社に在職中の平成十三年に取得していましたが、成年後見人養成研修を修了したのは平成十九年で、この時から後見人を受任し始めました。以後、現在に至るまで介護の仕事として介護支援専門員を、福祉の仕事として権利擁護の成年後見人をしております。

さて、この仕事でなかったらどの仕事をしていたかですが、母親が病弱だったので医者が希望でしたが能力と金がなく無理でした。

竹嶋　信洋（たけしま　のぶひろ）

このたび理事の大役を仰せつかった竹嶋と申します。二年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

竹嶋は大学を卒業後に社会福祉士の養成校に入り、社会福祉士としてデビューしました。福祉職フェアで出会った施設長に一目惚れし、千葉市にある知的障害者施設に入社しました。そこで「支援とは」「福祉とは」「人の暮らしを支えるとは」など、ありとあらゆることを教えていただき、二〇一二年に独立し現在に至ります。

さて、今回の頂戴したテーマ「もしかしたらなっていたもう一人の自分」についてですが、「なっていたら」というよりも「なりたい職業」であれば沢山語れます。多くの命を救う「医龍」に登場する朝田龍太郎のようなＥＲのドクター、金八先生のような教員、ヒゲの似合う海の家のマスター、制服が似合うパイロット、ニュース番組ができる芸人などです。

どんな職業でも良いです。大切にしたいのは、「親から丈夫に産んでいただいたこの身を人様に使っていただく」という心。目指すは、松岡修三のような「暑苦しい」と言われる男になることです。

常陸谷　政彦（ひたちや　まさひこ）

匝瑳市在勤在住の常陸谷政彦と申します。匝瑳市は銚子市、成田市、東金市を結んだあたりで、社会福祉士会事務局までは約一時間です。十二年前までは金融機関で働いていましたが、ちょうどその頃、実態の見えない前職場に嫌気が差していて、転職を考えていました。ある日、特養開設の求人募集を見ました。それ以来、世の中からお年よりはいなくなることはないだろうと考えるようになり、勢いのまま現在の社会福祉法人へ投身しました。

が、経歴を買われてしまい、法人の運営業務を担当することになってしまいました。そこでは資格社会が待っていて、こだわりと責任に翻弄され、僕も何か資格をと考え、二〇十一年に社会福祉士を取得しました。合格発表日が震災四日後の三月十五日で世の中が暗くなかなか告げられなかったことを覚えています。自宅で食事中に合格したことを伝えると今は亡き父が「よかったと」泣いて喜んでくれました。今の仕事じゃなかったらと思うと実際に社会福祉士をしてみたいのかなと原稿依頼の趣旨とお門違いのことを考える四十歳です。二年間宜しくお願い致します。

宮本　哲男（みやもと　てつお）

私は公務員として仕事をし、今は退職して別の仕事についていますが、公務員時代に福祉の仕事に十五年くらい携わってきました。

特に地域福祉計画の策定に携わり、その後社会福祉協議会に派遣されたことと自分の家族のことをきっかけに、遅まきながら社会福祉士の資格を取得して、現在に至っています。福祉の仕事に従事して、その間仕事の業務内容が変わるごとに、「福祉は人」と言われるように、多くの人に助けられてきました。現在でも多くの人に助けられながら仕事をしています。私にとって、人は大切な自分の財産だと言えます。人生の折り返しをとっくに過ぎた私には、この仕事をしていなかったらと言われても思いつきません。今思うと与えられた職場で仕事をする結果として、次の職場が与えられてきました。その間得た人脈や知識は、新しい職場で生かせることも多くありました。社会福祉士に必要とされる多くの領域の勉強や人脈は必ず将来に向かって役に立つと思っています。自分もまだ勉強することが沢山あります。今後とも皆さんよろしくお願いします。

山口　利史（やまぐち　としふみ）

柏市社会福祉協議会の地域支援担当、地域の支えあいの仕組みづくりに向けて、汗を流す日々です！

学生時代の私は、演劇に夢中な細身の青年でした。特に、アングラの世界にどっぷりはまっていました。全身白塗りになって路上で舞踏をしたり、野外でテントを張って舞台を組み立てたり、仲間と台本を夜な夜な練りオリジナルの芝居を上演したりと青春を謳歌。就職せず舞台俳優を目指しましたが、挫折しました。そこで諦めず続けていれば今の私は細身のおじさんだったかもしれません。

最後に演じた役が、児童養護施設出身者でした。舞台を辞めて、やる気もなくバイトを続ける日々の中で、以前取材のために訪れた施設の指導員や子どもたちと接する機会に救われました。役作りのプロセスから相談援助のプロセスへ、興味を方向転換していきました。社会福祉の勉強をしなおし、福祉職人になりました。そして、私の包容力もお腹も少しずつ育って参りました。「心はほっこり、お腹はぽっこり　山口です」お見知りおきを。

ソーシャルワーカーディ特別企画

「わたしの点と線」ネットワークを考える

支援を必要とする人は、ボールのようなものだと私は考える。私たち支援者はそれを下から支える支柱である。一本の支柱で支えていたのでは、圧力がかかってボールは傷ついてしまう。悪くすれば割れてしまうかもしれない。支える支柱も、一本では過度な重みがかかり折れてしまうかもしれない。しかし、そのボールを支える支柱が二本、三本と増えていき、それぞれが糸で結ばれてネットができた時、ボールは安定して収まることができる。

有効で統率されたネットワークを活用した支援を構築するには、日頃から関係機関と連絡を取り合い、お互いの役割と業務の範囲を理解・尊重すること、いざというときにはすぐにネットを張れるよう常日頃のコミュニケーションを絶やさないことである。また、支援が始まってからはキーパーソンが中心となり、介入すべき関係機関の担当者を把握し、日常生活を送る上で浮かび上がる課題ごとに連絡調整を取り、必要に応じてカンファレンスを行い、役割分担をした上で、支援方針を共有しながら支援に入ることが重要である。

こうしたネットワークの構築が「地域で当たり前の生活を送ること」を、誰もが持てる達成可能な願いに変えていくのである。

（生活保護ＣＷ　鈴木将人）

松戸市五香松飛台地域包括支援センター　センター長
左合　智樹
（さごう　ともき）

会の名前は「皆護ネットワーク」。皆護とは介護の当て字で「あなたらしい生活を皆で護る」という意味です。

二年前のケアマネ研修時十年ぶりにケアマネを取得した当時の三人と逢い、それぞれがそれぞれの立場で頑張っている事に刺激を受け、自分たちで何かできないか？がきっかけで発足しました。

当初は各々が自由に問題を提起し、半分はまじめに、半分は飲みにケーションの場でした。会を重ねる毎に人が人を呼び今では司法書士・弁護士・ケアマネ・各介護事業所・包括・理学療法士・後見人・建築関係者等々、多種多様なメンバーで市町村も異なる方々が参加してくれるようになりました。

多忙の中せっかくの貴重な時間なので、どこにでも存在するような集まりや自己満足で完結してしまうような会ではなく、ネーミング通り「皆で護り困っている人を救う」事に重点を置くようになっています。

最近の取り組みは、後見人が付いている特養入所者の方の施設プランや看護・介護記録等を取り寄せ検証して行く事になりました。施設側にとっては何事か？と恐怖を感じる事と思います。別に法的な力がある訳ではありませんが、その様な行動により昨今問題にあがる施設虐待を少しでも牽制できれば！との思いがあります。

また、当包括の担当地区の地

域社会においては近所づきあいが気薄となり、隣の家で孤独死が起きても他人事という世知辛い世の中ですが、「向こう三軒両隣」の関係構築を十年かけてやりたい。「向こう三軒両隣」は地域コミュニティの原点であると思います。何をどのようにどうやって…理想を可能にするにはまず自分の住んでいる地域から始めないといけないと思っています。

十の理想を掲げても上手くいって二つぐらいしか実現できない。そこで諦めて五の理想を掲げたら何もできない…理想を言わなくなったら福祉の仕事についている意味がない。そんな思いで日々業務に追われています。

福祉とは制度が作るものではなく人と人との繋がりによって皆で作り上げていくものだと思います。その為には思いを持った人と人とを繋ぐ事に労力を割かなければなりません。

地域包括ケアシステムの構築が不可欠と色々な研修や図で紹介されていますが、ネットワーク形成は形ではありません。人が人を呼びその輪が自然に広がり各々が各々の立場でその方の思いを尊重しつつその方が望む「幸せ」を追求していく「チーム」こそが強固なネットワーク構築に繋がると考えます。

制度や公的機関では解決できない、すなわちグレーゾーンの方に対してどのような手段でアプローチできるかがソーシャルアクションの第一歩です。社会のひずみの中でもがいている方々を救うのは制度だけでは救えない。最終的には人との繋がりなのだという強い信念があります。ソーシャルアクションを起こすのは簡単な事ではありませんが、静かな湖畔に一石を投じ岸に着く迄に大きな波となり皆を巻き込めるような！時には制度（行政）を変えていけるような！そんな思いに少しでも賛同してくれる仲間と共に皆護ネットワークに取り組んでおります。

安房介護一揆
代表　渡辺　友和
（わたなべ　ともかず）

安房介護一揆を立ち上げるきっかけになったのは知り合いが出演していた介護のドキュメンタリー映画「九月十一日」でした。全国から広島のライブハウスに介護の事業を始めた若者が集まり、思いをぶつけ合うというもの。当時の私自身が、施設介護をしてきた十年間のなかで数々セミナーに行き、全国各地のいろんな人と出会い、意見をぶつけ合い、分かち合っていく中で『『介護』を事業所や年代、職種を越えて考えていけないだろうか。また、そこからアクションができないだろうか」と考えるようになりました。また自分の中で疑問であったことは「世間と介護保険のズレ」でした。介護が必要になったら、介護保険を使わなくてはいけないのか。制度に乗せなくてはいけないのか。ご近所で呆けている人がいても助け合っているコミュニティが、まだこの南房総にも存在しています。歩き回ってしまうおじいさんがいれば、近所のお店の人が「あそぉに、やんでった（歩いてった）よ」と教えてくれたり、デイサービスに近所の人が送り出したり、近所の方が家事をしていることもあります。介護保険や制度がそこにはありません。たいへんでしょうが、でも活き活きしているのです。介護って楽しいのかもしれません。なぜでしょうか。繋がりこそが、その人を、いや、

その人以上を救うこともあるのではないでしょうか。ただ、その繋がりは「お金」では実感できない。なんとかできないかなぁと思いは募りました。当時から既に東京の「とうきょう地域ケア研究会」、松戸の「ちば地域ケア研究会」などの「ケア研」というものがありました。ただ研究をするよりもどちらかといえば「仲間づくり」や「つながり」を作ることが本来の目的なので「何かでつながり、アクション起こす集まり」という意味の『一揆』という言葉と、古来の呼び名「安房」を使い『安房介護一揆』が生まれました。そうして、二〇一一年三月四日に全国初の「九月十一日」上映会を開催しました。各事業所に声をかけ十数名が集まり、地元の新聞社も取材に来ていただきました。そのおよそ一週間後、東北の震災が起きました。一時、活動を休止しましたが、翌年、そのつながりで小規模多機能ホームろくじろうの開所記念パーティーを開催。そして、繋がりのなかで「オムツはずし学会を南房総でやらないか？」と話がありました。オムツはずし学会というのは、三好春樹氏が一九八八年から主催しているセミナーで、私も毎年参加していたものです。南房総市にも講演を依頼し、最初に集まった仲間たちにも声をかけていくうちにどんどん仲間は増えていました。二〇一二年十一月開催までのプレ開催として「御籠」（おこもり）という名の講師を呼ぶ勉強会を開催し、おかげさまで当日は二百人近い動員。その後も介護ライターの野田明宏さんの講演や「館山の駅前の民家のデイサービス」みのりの家の開所式に協力させていただきました。昨年は「介護は力を使うものではない、力を引き出すものなんだ」という実技の自主セミナーを行いました。これからも介護現場が閉塞的に、独占的にならぬよう、介護は楽しく奥ゆかしいということを再確認できる場としてパーティーを展開していこうと考えています。

いちはら生活相談サポートセンター
大戸　優子
（おおと　ゆうこ）

ネットワークのその先へ

「大戸さん、ネットワークをテーマに『点と線』に原稿を書いてみませんか？」ある会合が終わった時、参加していたメンバーの一人からそう声をかけられました。その会合とは『千葉県生活困窮者自立支援ネットワーク準備会』。まさに、生活困窮者支援に関わる支援者のネットワークをこれから形作ろうとしている会合でした。そのようなタイミングでのお話に、一瞬逡巡したものの良い機会と思い書いてみることにしました。

私は、市原市から委託を受けた自立相談支援機関の職員として働いています。（生活困窮者自立支援制度の説明については本誌バックナンバーでも特集されていましたので割愛します。個人的には八九号の対談を興味深く読ませていただきました。）

相談者お一人おひとりの課題に向き合い、解決に向けて支援を展開するうえで自立相談支援機関が単体でできることは限られています。当然、様々な機関や人・団体との連携・協力はなくてはならないものですし、個別対応だけでなく地域づくりにあっては尚更です。相談支援の仕事をするうえでネットワークが肝と言っても過言ではないと思っています。

ところで、ネットワークという言葉は非常によく使われますが、その実態は何でしょう？漠然としていますよね。なんでもかんでもネットワークと言って話がまとまった気になったりお茶を濁したりということはありませんか？「ネットワークってそもそもなに？説明して」と言われたらどう説明しますか？職場で問うてみたら様々な答えが返ってきました。

自立相談支援事業従事者養成研修テキストによると「生活困窮者支援におけるネットワークとは、関係者のつながりによる連携、協働、参画、連帯のための状態および機能のことである」とあります。そうか、状態でもあり機能でもあるので話がややこしくなるのかと納得。更に「状態を維持するためには、何らかの機能がそこに伴うことが不可欠です」とありました。なるほど、形だけ作っても続かないよということですね。

さて、この一年仕事をしてきて渇望したもの、それは県内の同じ自立相談支援機関の方たちとのつながりでした。新たな事業に取り組む中での悩みや苦労を吐き出し、支援ノウハウの共有や共同での人材育成ができる場やつながりが欲しくて欲しくてたまりませんでした。要するに、支援者を支援するためのネットワークです。

そして、ないなら作ってしまおうと同様の想いを持つ方たちに呼びかけをし準備を進めているところなのです。

私は、ネットワークの目的は「多様性に応えること、可能性を拡げることを促進すること」だと思います。支援者ネットワークを機能させることで、その先にそれぞれの現場でのよりよい支援が見いだせる、そう思って歩みを進めています。

ブレインストーミング

～ある夜のデイサービスで～

Tさん　もう、九一号になるね。今号の特集の一つは新理事の紹介で決まりだね。どんな自己紹介してもらおうかね。やっぱり初恋エピソードを書いてもらう？

Mさん　それより、二番目の恋のほうがリアルでしょ。担任の先生とかなしで。
（注：議論の結果、自己紹介記事は別のものとなりました）

Sさん　ちょっと休憩にする？またシュークリームあるよ。

Oさん　やったぁ♪いただきまーす！

Yさん　Oさん、またクリーム飛ばしてる！。

Sさん　特集2では、「ネットワーキング」が題材になっていますね。

Mさん「ネットワークとは？」「何のためのネットワークか？」「ネットワークの向こう側」そこがみえるような記事ができあがるといいですねぇ。

Tさん　記事を依頼するときには地域が偏らないように意識したいですね。

Oさん　そうですよ。私、さっそく南房総に旅にでかけてきまーす♪

一同　心の声：（旅行したいだけだろ：）

広報部会は、柏市内のとあるデイサービスをお借りして、和気あいあいと楽しく活動しています。皆さん、お気軽に編集会議や発送作業に来てみませんか？

地域集会

つながるネットワーク

佐倉・四街道・八街地区

「スクールソーシャルワーク千葉県交流会」

平成二八年三月十九日（土）十三時半～十五時、（特非）日本スクールソーシャルワーク協会（ＳＳＷ協会）との共催により「第三回千葉県スクールソーシャルワーク千葉県交流会」と佐倉・四街道・八街地区の地域集会が同時開催されました。

会場となっているのは佐倉市内にあるＮＰＯ「ほっとすぺーす・つき」事務所。事務所と言っても、世代を問わない居場所の提供や子ども食堂、学習支援等の事業も行っている場所なので、三十人程度入れてプロジェクター等の機材も揃っており、最近の地域集会は会場を固定して行っています。

ご存知の方も多いかと思いますが、千葉県ではスクールソーシャルワーカー（以下、「ＳＳＷ」）の配置があまり進んでいません。ＳＳＷのみを集めても人も限られますし、子どもの支援は多くの専門職がチームで関わるもの。そこで、両会の会員以外の参加も広く呼びかけているのがこの交流会の特徴です。参加者の約半数は両会の会員ではない方々が占め、今回は（前回も）地元の民生委員や市議会議員など、様々な立場からの参加者を得て社会的な関心の高さを伺わせます。

内容としては、白梅学園大学の牧野先生を講師に迎え、全国の配置状況の実情と千葉県の実態をご説明いただきました。全国各地でも地域ごとにＳＳＷの配置方法や業務内容にそれぞれ特色があり、その中でも千葉県は全国でも類を見ない「拠点校配置型」という配置形態をとり、ＳＳＷの活用にあたり配置校の意向が大きく影響する特異な地域であることを改めて確認しています。また、あまり知られていませんが、県立高校の一部（四校）を「地域連携アクティブスクール」として指定し、指定校には県教育委員会の中でも別部門、別予算によりＳＳＷが配置されているとの報告もいただきました。

質疑の後には参加者同士でフリートーク。講師も交え、会場のあちらこちらでＳＳＷの活用や子どもの貧困対策に関する話題が花開き、それぞれの実践や立場からのコメントで盛り上がっていました。

千葉県社会福祉士会には現時点で子どもの支援に関する部門がありません。虐待、子どもの貧困や未成年後見への対応等、子どもの支援で社会福祉士が求められる場面も役割も確実に増えています。

一人の手では抱えきれない大きな課題、個々の実践だけでは対応できない多くの子ども達やその家族のため、会の活動にご協力いただける方は是非、会の事務局を通じてお声かけください。ご協力いただける方が集まれば、新たな委員会や部会が立ち上がり、会としての取り組みが始められるのではないでしょうか。

社会福祉士のわ

介護老人保健施設
ユー・アイ久楽部
喜多見　香織
（きたみ　かおり）

〈自己紹介〉

千葉県生まれ。県内の大学に進学し、学生時代はボランティアサークルに所属し高齢者施設や障がい者を訪問したり、手話コーラスをやっていました。

大学の先生方のサポートもあり卒業と同時に社会福祉士を取得。現在の職場に就職しました。趣味は映画鑑賞やスポーツ観戦（野球など）。旅行も好きで特に沖縄が好きです。次は行った事の無い九州に行きたいなぁと思っています！

〈社会福祉士との出会い〉

大学への進学を決めたのは高校三年生の時の担任の先生の勧め。「この仕事、向いていると思うよ。」

と言われ、詳しく話を聞いてみたら〝福祉って人に優しそう。何かいいかも！〟と感じたからです。大学入学後は講義を受けたりボランティア活動を行っていくなかで、「社会福祉士って困っている人の元へ行き、話を聴き、人やサービス様々な制度を結び付けていく人、福祉の道案内人なんだなぁ」と感じるようになりました。この頃から、将来は社会福祉士として働きたいと思うようになりました。

〈そして就職〉

福祉職の公務員や医療ソーシャルワーカーも考えていましたが、大学の就職課で現在の勤務先の求人を見つけ、支援相談員として入職することとなりました。始めは電話を受けるだけでも緊張の毎日で失敗も沢山しましたが、経験を重ねていくなかで相談援助とは何かを学んでいきました。現在は、通所リハビリと短期入所の支援相談員をしていますが、入院病床のあるクリニックを併設している事もあり、ご利用者の最期を見送る事もあります。その際には「～していれば良かった」「もっと～できてたのではないか。」と感じる事も多いです。

〈今後は〉

最近では、相談内容も障がい者分野や難病、権利擁護、生活保護など様々です。介護保険だけではなく、他の制度の申請の仕方などを聞かれる事も増えてきました。また高齢のご夫婦二人暮らしの方も多く、ご本人だけでなくご家族を含めた支援の大切さを感じます。相談援助はその人の人生に寄り添える仕事だと思います。同じ支援の仕方はなく日々勉強ですが、少しでもご利用者の役にたてる、福祉の道案内人になれるよう頑張りたいと思います。

新企画 ぼやきの壺

今回のぼやき人　某市役所Mさん

これまでずっと市役所の福祉部門で、ソーシャルワーカーの仕事をしてきました。市民の相談をうけて、悩みながらもネットワークを活かして問題解決のお手伝いをすることに、やりがいを感じていました。

しかし！時の流れとともに、経験年数が積み上がりいつしか現場のとりまとめ担当になってしまいました。今は、係員が忙しくケース訪問に出かけるのをうらやましく見ています。提出される記録をチェックしていても、物が捨てられなくて困っている方の家の訪問も、大変さを思い出しながらも懐かしく思ってしまう自分がいます。

若い力を育てなければ、と思いつつ、まだまだ現場にいたい、と思うのはいけないことでしょうか？

仕事はひとりじめしない。シェアしましょ。

あなたの経験に基づいたアドバイスが

若い力を育てるものよ。

事務局便り

今年は猛暑との予報が出ていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、会員の皆様のご協力のもと、第４回定時総会を無事に開催することが出来ました。ご出席いただいた皆様、書面表決・委任状をご送付いただいた皆様、ご協力ありがとうございました。

また、総会終了後開催の県民公開講座にはたくさんの方にご聴講いただきました。ありがとうございました。今後ともご理解・ご協力を宜しくお願いいたします。

お忙しい日々をお過ごしのことと思います。暑さますます厳しき折、くれぐれもご自愛ください。

研　修　等　・　行　事　の　お　知　ら　せ

○　平成 28 年 11 月 15 日（火）、16 日（水）社会福祉士実習指導者講習会 開催予定

※研修等が新たに決定した際にはホームページに随時掲載致します。是非チェックしてください。

千葉県社会福祉士会ホームページ：http://www.cswchiba.com/

ようこそ！千葉県社会福祉士会へ

氏名	居住地	勤務先	氏名	居住地	勤務先
杉江　真由美	白井市	柏市役所	尾高　百合子	茂原市	千葉県夷隅健康福祉センター
山田　智美	船橋市	―	安藤　宏之	船橋市	―
鈴木　由美子	緑区	千葉県千葉リハビリテーションセンター	小野寺　浩	白井市	デイサービスあおぞら
有賀　真津夫	流山市	株式会社みくに	小柳　光代	佐倉市	―
狩野　文乃	稲毛区	千葉県こども病院	片岡　彰則		社会福祉法人 槇の里 いすみ学園
藤田　敦子	船橋市	NPO 法人 千葉在宅ケア市民ネットワーク ピュア	鶴岡　三江子	睦沢町	―
小沼　綾子	成田市	社会福祉法人 富里市社会福祉協議会	根本　充	四街道市	社会福祉法人 千葉シニア特別養護老人ホームまごころ館 四街道
飯田　篤史	富津市	特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里	肥後　圭太	習志野市	―
尾崎　仁美	浦安市	医療法人愛友会 介護老人保健施設ケアセンター習志野	秋山　大	我孫子市	㈱K＆T/在宅介護サービスほたる/障害者福祉サービスほたる
渡邊　洋二	市原市	―	入江　節子		社会福祉法人 八千代市社会福祉協議会
三木　太雅		―		若葉区	―
佐久間　努	袖ケ浦市	―	金澤　秀則	袖ケ浦市	―
吉田　浩滋	鎌ケ谷市	国際医療福祉大学 成田保健医療学部	鈴木　優子	長南町	―
荒井　妙子	八千代市	コープみらい習志野介護センター	鈴木　美砂子	若葉区	社会福祉法人 慈心会 特別養護老人ホーム更科ホーム
安蔵　豊明	市川市	―	萩原　恭子	柏市	社会福祉法人 桐友学園 沼南育成園

※正会員登録書「点と線掲載の可否」の項目で、可に○を頂いている方のみ掲載しております。（順不同・敬称省略）

平成 28 年６月末現在の会員数

正会員　1,385 名、　準会員　４名、　賛助会員　２名　　合計　1,391 名